桜美林発「学生ビデオジャーナリスト」育成の試み

中山 市太郎

キーワード：「ビデオジャーナリスト」、「知られざる世界」、「市民映像メディア」、「メディアリテラシー」、「スープの会」

概要

市民が撮影した記録映像が、放送やインターネットを通じて流れ、貴重な「時代の証言」として機能していることは、チュニジア「ジャスミン革命」、「3.11 東日本大震災」など枚挙にいとまがない。デジタル技術の普及で身近な記録をビデオカメラに収める市民や学生が増えたことがその背景にあるが、一方で、自分の考えや体験を的確に伝えるスタンダードな技術や考え方が確立していないため、不穏当な映像が多く見られるのも事実だろう。

2008 年 4 月から始めた授業「ビデオジャーナリズム入門」は、その意味で、インターネットによる映像発信など新しい動きに対応させるべく企画された講座である。家庭用の小型デジタルビデオカメラを使い、撮影・編集・作品完成までの作業をひとりで行う「ビデオジャーナリスト」方式を取り入れている。テーマも一つに絞込み、一か所で腰を据えて取り組む「定点取材」が最終課題だ。

「定点取材」の原点は、私の番組体験、1970 年代のテレビドキュメンタリー番組「知られざる世界」がもとにもなっている。取材対象を一点に絞り込むことで、見えてくる課題もはっきりし、モチベーションを上げることにもなるからだ。

演習の狙いは、ドキュメンタリー番組の制作を通して社会と向き合う姿勢を培い、社会問題を考える習慣づけにあるが、学生たちは企画の段階から取材、編集まで、ことごとく「壁」にぶつかり右往左往する。しかし、その右往左往の積み重ねが大事で 1 年もすると 10 分、20 分、30 分のドキュメンタリー番組を作れる力が付いてくる。

本稿はその試行錯誤の記録である。

はじめに

映像デジタル技術の進展は、映像のプロだけでなく、企業広報マン、主婦、学生など幅広く一般市民にまで、映像メディアを使って情報を発信する道を開いた。でき上がった作品も、テレビにつないで上映したり、インターネット上にアップしたり、ユーストリームで中継番組を作り上げたりと多様だ。動画付き電子出版物として流通を試みる動きも出てきている。小中学生でも最近は「自主番組」を作り、テレビ局に投稿する子どもたちがいて、ＮＨＫ教育テレビの『デジスタティーンズ』などの投稿映像を見ると、撮影技術や編集技術の面では相当に高度なものも見られ、プロ顔負けの子どもがいるので驚かされる。

デジタル技術を活用して、新しいメディアに映像を投稿する次世代を「デジタルキッズ」と呼び、ユーチューブなどこれからの映像メディアを担う世代と期待する向きもある。こうした背景もあって、ここ十年ほど全国の大学のカリキュラムに映像関連の学科や講座が相次いで設立されてきた。各大学の講座案内を HP から拾ってみたが、その設立の目的は、概ね早稲田や上智などジャーナリスト輩出の伝統校といわれる大学でも、これまで培ってきた放送・新聞などマスコミ業界に向けた人材育成（ジャーナリスト教育）を中心に置きつつも、グローバル化し複雑化した現代社会の課題を「発見し、読み解き、伝える」ことのできうる人材の育成（メディアリテラシー教育）をあわせてうたい、広く「社会の要請」に応えるなど、各大学ともほぼ似たような目標を掲げている。

ニュースを「読み解き、考え、そして伝える」ことのできる能力は、既存のメディア業界だけでなく、企業や行政の宣伝・広報活動の担い手にとって、教育や福祉、ボランティ活動や市民運動の担い手にとって、必須の資質であり今日的な意義を帯びている。従って私たちも、新しいメディアの時代に適合できる人材育成を考える必要があり、メディア（ジャーナリズム）の教育プログラムもそうした要請を背景に充実させるべきと考えている。

無手勝流ではじまった市民映像メディア

インターネットやモバイルメディアなど学生を取り巻く映像コミュニケーションのツールは多様に広がってきている。しかし、それを使いこなし、幅広い世代に向けて的確に自分の考えや体験を伝えるスタンダードな技術や考え方は、まだ確立していない。

このためテレビ番組など既存著作物のコピーや改ざん、伝聞による誹謗中傷、犯罪もどきの粗悪な映像情報のネットへの露出など、社会的な混乱を一部で生んでもいる。半世紀以上にわたる放送文化を経て、ようやく手にした市民映像メディアだが、その運用はまだ手探り状態にあるといえよう。

デジタル技術の進展で、廉価で高画質のビデオカメラが普及し、パソコンレベルでのビデオ編集が一般の職場や教育部門、市民レベルへと広まり始めたのは、ほんのここ10年あまりのことである。このため、いわばこれまで無手勝流で番組作りを行ってきたといっても過言ではない。

「ビデオジャーナリスト方式」の導入

2008年4月から始めた授業「ビデオジャーナリズム入門」（演習科目）は、その意味で、インターネットによる映像発信など新しい動きに対応させるべく企画された講座である。

演習では、家庭用の小型デジタルビデオカメラを使い、撮影・編集・作品完成までの作業をひとりで行う「ビデオジャーナリスト」方式（注1）を取り入れている。学生たちは、「ドキュメンタリー番組」の企画書を書き起こし、取材の交渉から、実際の撮影、インタビュー、著作権処理、編集などすべてにわたって実践的に体験していく。技術ももちろん大切だが、演習の狙いは、ドキュメンタリー番組の制作を通して社会と向き合う姿勢を培い、社会問題を考える習慣づけにある。

このため学生たちは、「撮りながら考え、考えながら撮る」ことを絶えず意識するよう求められる。映像的には拙いものでも、取材活動を通じた失敗の経験がけっきょくは、リテラシーとして身に付くと考えているからだ。

映像も「思想を語る言語」である以上、映像独自の方法論を身に付け、的確なメッセージを受・発信できるようにする必要がある。そのためにも、文章作法と同様に、映像を読み解くリテラシーが大事だ。デジタル時代になり、放送以外にも映像メディアの場は広がってきていて、卒業後に、ビデオカメラを使う機会は増えて行くものと予測している。そうであれば一層、演習ではドキュメンタリー番組の制作を通して、メディアリテラシーの習得に努めさせたいと考えたわけである。

CGの高度化や、カメラのデジタル化で映像はどうにでも技術的処理ができるが、番組作りを担う「人材」の養成は一朝一夕にはできない。私たち大学人に求められるのも、けっきょくはメディアを読み解く力を持ち、社会にきちんと向き合える学生の育成であろう。

そこで実践活動を通してリテラシーを身につけられるビデオジャーナリスト方式の「ビデオジャーナリズム入門講座」を演習科目として、2009年4月にスタートさせたのである。

普通、ドキュメンタリー番組の撮影現場には担当ディレクターとカメラマン、場合によっては専門の照明マンや録音マン、インタビュアーなどそれぞれ専門スタッフがつく。分業体制が定着しているのだ。

分業制は取材する側にとって、何かと都合がよい。撮影、照明、録音、インタビューな

どそれぞれ担当分野があるため、責任の分担が図れる。現場に複数のスタッフの眼があるので、迷った時に相談もできれば、取材ポイントを見逃すというリスクも軽減されるというわけである。しかし、いかにも「テレビ局が取材に来ています」ということで、相手も意識過剰になりやすい。なかなか本音ではインタビューに答えてはくれないし、取材のタイミングを失うことすらある。うかうかすると、通り一遍の取材に終わりやすい。

これに対して、何から何まで一人でやるビデオジャーナリストの場合、取材する側もされる側も基本的には「一対一」という関係の中でカメラを回すことになる。相手も取材クルーに取り囲まれて取材を受けるのと違って、距離感が縮まり、本音でしゃべりやすいという利点がある。

一方で、取材する側の事前の調査や問題への習熟度、取材時の態度など、ビデオジャーナリストの人間性や力量が相手に直接伝わるので、いい加減な態度は見透かされてしまう。取材する側にとっては、しんどいと言えばしんどい方法だ。きついが、リテラシーの習得には適した取材スタイルであろう。授業に、ビデオジャーナリスト方式を採用したのもこのためであった。

原点は『知られざる世界』

ビデオジャーナリストは、いまでこそ企画から、取材、編集まで一貫して「一人のジャーナリストの視点」で作るものと広く認知されているが、ジャーナリスト固有の視点でテーマをひとつに絞り、じっくり時間をかけ取材を進める似たような「定点取材」方式(注2)は、実はかつてのテレビドキュメンタリー番組の制作現場にもあった。

テレビがようやく定着した1970年代、日本テレビ系列で長期にわたり放送されていたドキュメンタリー番組『知られざる世界』『すばらしき世界旅行』である。いずれも「定点取材」方式を取り、ディレクターの視点をそのまま前面に打ち出し、ディレクター自身が時に画面に出て取材の意図や経緯を解説していくという学術記録映画のような制作スタイルを取り入れていた。

なかでも『知られざる世界』は当時、辣腕プロデューサーとして知られた牛山純一（1997年死去）が日本テレビを退職し日本映像記録センターを立ち上げ制作を始めた番組で、私もディレクターの一員として何本か制作を任された。この番組は、社会・事件・科学など森羅万象を対象テーマに、出来事や現象のメカニズムを自然科学や社会科学の視点で解き明かしていくもので、ナレーションを個性派俳優の故佐藤慶さんが担当したこともあって、お堅い番組ながらけっこう人気があった。

牛山は、担当ディレクターの取材について新聞社の社会部、科学部という「専門記者」

のような分担制をイメージし（私は主に事件ものだった）、各々自分の関心ある領域からテーマを発掘させ、企画提案させる方式を導入したのである。

テレビ局は既に「面白くなければ放送しない」という時代に入っていて、制作会社がどこも視聴率の取れそうな話題を追いかけることに邁進し始めたころに、牛山は、定点取材やテーマ性の追求にこだわる番組つくりをめざしたのだった。

当時はまだフィルム取材の時代で、カメラのほかに録音機材や照明機材を別に持たなければ音も絵も撮れず、専任のクルー4、5人で取材するというのが番組作りの現場では普通だった。しかし牛山は、カメラマンに担当ディレクターの「2人体制」で取材することを求め、ディレクターには録音機材や照明機材も担がせた。それだけではない。放送時には、ディレクター自ら音声出演させ、自分が見てきた「現場」を直接解説させるなど、ディレクターの役割は今日のビデオジャーナリストに近かった。

人件費を徹底的に切り詰めたのである。その代わり、現場に長期間とどまって取材するフィルムの量と、調査や取材時間には費用を惜しまず、「定点取材」を可能とする制作体制を敷いたのだった。現場の過重労働たるやたまったものではなかったが、若かったので、時間に追われるテレビの現場で、取材に執着できる時間とフィルムの量は大きな魅力だった。

後に私は、朝日新聞社が立ち上げた衛星放送局「朝日ニュースター」に移り、開発されたばかりの家庭用小型デジタルビデオカメラを使った新番組『フリーゾーン2000』(注3)を立ち上げる。プロ用のカメラを使わない番組で、画質も音質も悪い、テレビ界初のホームビデオによる90分のドキュメンタリー番組であった。

番組の骨子は新聞記者のように専門領域を持つ「映像記者」が(注4)、ペンの代わりにビデオカメラを回しインタビューを取り、取材した素材を持ち帰って自分で編集し、番組に出演、自らリポートするというアイデアだったが、その発想は牛山の「定点取材方式」にあったことは言うまでもない。

この番組では、環境問題や幼児教育、社会福祉などの専門家にカメラを託し、市民ジャーナリストとして「専門家の目」から見た現場の問題をレポートするという試みも取り入れた。彼らの撮ってくる映像には、問題意識こそ詰まっていたが、音がずれていたり真っ暗で何が写っているか分からないなどの素材もあって、はじめは編集段階で苦労した。

しかし1991年。南極観測船に同乗した東大大学院生が海洋生物の研究映像ルポを番組で発表。「高柳財団科学放送奨励賞」(注5)を受賞する。映像のぶれや、現場音声の聞きづらさなど、既存放送局のレベルでは到底放送に耐えられないといわれたものだが、この年のNHKスペシャル『電子立国ニッポンの自叙伝』と並んでの受賞で、その手法が改めて注目されることにもなった。それまでテレビ局や映像プロダクションなど一部プロしか扱えなかった映像メディアでの情報発信が市民権を得た初めての出来事で、放送メディアにとって画期的試みと評価されたのだ。

まだインターネットでの動画は始まっておらず、CS 放送という限られたメディアとはいえ、映像の使い手としてはアマチュアであった女子学生の撮った 30 分の番組が、放送電波に乗り、ついには地上波放送局の多くの優れたテレビドキュメンタリー番組を押しのけたからである。

その後私は、『フリーゾーン 2000』がきっかけとなって、テレビマンユニオンなど立ち上げた故村木良彦氏に誘われ 1999 年「東京 MX テレビ」に移籍。ビデオジャーナリストによるニュース専門番組『東京ニュース』の立ち上げに関わったりした。これらビデオジャーナリズムの発想は、振り返ってみればテレビ番組『知られざる世界』が出発点になっていて、桜美林大学における「ビデオジャーナリスト入門講座」の基本コンセプトもそこから出発している。

「ビデオジャーナリズム入門講座」― 技術的環境

ゼミをスタートさせるにあたって、基本的な方針は決めていた。

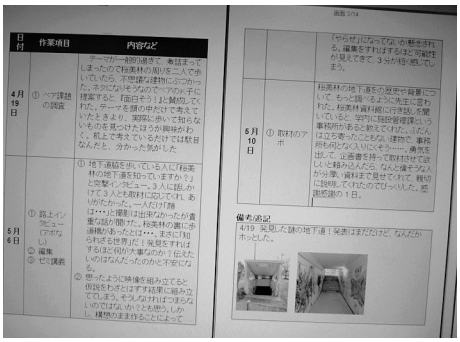
まずは取材と編集環境である。先にも述べたように、カメラは家庭用のビデオカメラを使い（それも 1 台 3 - 4 万円程度の安価なカメラ）、編集は通常のパソコンで対処できる範囲で制作することを基本方針とした。ママさんが子供の成長記録や運動会の記録映像を撮影し、簡易編集する要領でやることにしたのである。こうした環境下では撮影の画質や、編集時のスーパーやエフェクト処理など技術的制約は避けられない。高級デジタルカメラやプロ用の機材を使えば粗い映像でも後でいくらでも補正ができ、適切な効果音や CG を取り入れることで、見てくれは立派な「完パケ」作品（編集され、ナレーションやテロップなど必要な文字情報も付いて、そのまま公開できる状態に仕上がった完全パッケージのビデオ作品）を作ることができる。

しかし安価な家庭用ビデオカメラや編集ソフトでは、補正にも限界がある。その技術的制約が、むしろ、私の授業では利点であった。補正や後処理といったデジタル加工技術に制限があるので、基礎的な取材や編集セオリーの欠如がそのままごまかしなく完パケとなって作品に現れてきてしまうからだ。この面でも、学生たちは映像リテラシーを身に着けないと、第三者に訴える映像メッセージなど到底作れないことを、身をもって知ることになるので都合が良かった。

「ビデオジャーナリズム入門講座」― 企画を詰める

授業では「企画」⇒「取材」⇒「編集」⇒「完パケ」の各々の段階ごとにチェックを入れる。各段階ごとに学生は想定外の出来事に直面するので、それをひとつづつ乗り越えて行くことで、映像リテラシーを体験的に学んでいけるはずである。

このため、学生たちには企画書の提示や撮影・編集などそれぞれの段階ごとに直面する問題を「映像日誌」（規定フォーマットがある）に記録することを義務付けさせた。「映像日誌」に取材時や編集時の問題点など、その時に感じたことや出会ったことを記させることで、学生自身に次の課題が見えてくるようにしたのである。



日付	作業項目	内容など
4月19日	① ペア課題の調査	テーマが一致の場合で、本は決まってしまったので桜美林の周りを二人で歩いていたら、不思議な建物にぶつかった。ネタにならそうなのでペアの水子に提案すると、「面白そう！」と賛成してくれた。テーマを頭の中だけで考えていたときより、実際に歩いて知らないものを見つけたほうが興味がわく。机上で考えているだけでは駄目なんだと、分かった気がした。
5月6日	① 路上インタビュー（アポなし） ② 編集 ③ ゼミ講義	① 地下通路を歩いている人に「桜美林の地下通路知っていますか？」と突撃インタビュー。3人に話かけて3人とも取材に応じてくれ、ありがたかった。一人だけ「無理…」と撮影は出来なかったが貴重な話が聞けた。桜美林の裏に歩道橋があったとは…。まさに知られざる世界だ！発見をすればするほど知りたくなるのか？伝えたいのはなんだったのかと不安になる。 ② 思ったように映像を組み立てると、仮説をわざとはずす結果に組み立ててしまう。そうしなければつまらないのではないかとも思う。しかし、模索のまま作ることによって
		「やらせ」になってないか？疑問を感れる。編集をすればするほど可能性が見えてきて、3分が短く感じてしまう。
6月10日	① 取材のアポ	桜美林の地下通路の歴史や背景について、もっと調べるように先生に言われた。桜美林資料館に行き話を聞いていると、学内に施設管理課という事務所があると教えてくれた。ふだんはなにも考えたこともない建物で、事務所も何となくいにくそう…。勇気を出して、企画書を持って取材させて欲しいと頼みんだら、なんと嬉そうに人が分厚い資料まで見せてくれて、親切に説明してくれたのでびっくりした。感謝感謝の1日。

備考/感記
4/19 発見した謎の地下通路！発表はまだだけど、なんだかホッとした。

（写真①、規定フォーマットの「映像日誌」から）

授業がはじまると、学生たちはまず最初のテーマ設定にと惑う。桜美林生としてふだん何気なく見たり聞いたりしている学内の、「ヒト、コト、モノ」を観察し、自分たちで見つけた学内の『知られざる世界』を2-3分のビデオレポートにまとめ、報告するよう求められるからだ。キャンパスを取材現場に見立て、学内に眼を凝らし、「現場」から取材ネタを探し出すのは容易ではない。おまけに記念すべき1本目は、2、3人1組でチームを組み、共同作品を作らされるのだ。ゼミ開始早々でお互いにまだ名前も性格もよくつかめない状況で、異質な学生同士で「企画」を競わせ、一本に絞り、共同で「取材」「編集」していくことで、ドキュメンタリー作品をまとめる難しさと面白さ、複眼的な視点の意外性などを体験させようという狙いだ。カメラを初めて持つような学生に、いきなりこのテーマは難しいように思われるが、学生たちのモチベーションは意外に高い。

「なぜ桜美林に孔子像が？」「町田市民に聞いて見た！　リベラルアーツって分かります？」「J.F Oberin ってだれのこと？」「知られざる世界　桜美林にも地下道があった」「教会のパイプオルガン。その知られざる魅力」「三者三様、学生食堂の味の違いは意外なところにあった！」「どこでも輪になる昼食タイム　ニッポンの学生って不思議？」、「名物教授、知られざるもうひとつの素顔とは？」などなど最初に持ち寄るテーマは、毎年、十

人十色で、テーマタイトルだけでも、立派な『知られざる世界』である。

もちろんこの段階では思いつきのものがまだ多く、実際の取材までには調査や取材許可など必要になり、すぐに取材着手とは運ばない。取材対象者に対して的確な事前説明が必要になる。取材意図など企画の説明から編集の考え方、作品完成後の映像の発表の方法まで、相手に信用してもらえなければ取材どころではないからだ。

カメラを向けることができなければ何も始まらない、映像ジャーナリズム特有の壁に、学生たちはまずぶつかるのである。そうした企画や取材段階で出会う「壁」を、学生たちは「映像日誌」に記録している。企画・取材段階の事例をいくつか紹介しよう。

「テーマが一般的過ぎて、煮詰まってしまったので桜美林の周りを二人で歩いていたら、不思議な建物にぶつかった。ネタになりそうなのでペアのK子に提案すると、『面白そう！』と賛成してくれた。テーマを頭の中だけで考えていたときより、実際に歩いて知らないものを見つけたほうが興味がわく。机上で考えているだけでは駄目なんだと、分かった気がした」（謎の「地下道」を発見した経緯について）

この後、なにが『知られざる世界』か、地下道の歴史・経緯について調べてくるように言われた学生は、

「桜美林資料館に行き話しを聞いていると、学内に施設管理課という事務所があると教えてくれた。ふだんは立ち寄ったこともない建物で、事務所も何となく入りにくそう。勇気を出して、企画書を持って取材させて欲しいと頼み込んだら、なんと偉そうな人が分厚い資料まで見せてくれて、親切に説明してくれたのでびっくりした」

「同じグループのMさんと、事前に考えてきた企画を出し合い、『桜美林でいちばん歴史のある部活はどこか？』という企画にたどり着く。学生組織のO.A.C.U（注6）に連絡を取り、取材依頼をしたら責任者がいないから、とはじめは断られてしまった。後でまた連絡することにして、とりあえず私たちの企画をゼミで発表することに。けれどなにが『知られざる世界』なのか、と問い詰められて答えられなかった。けっきょく、また一から企画の内容を練りなすことに」（伝統的部活紹介の企画提案に失敗して）

「A案『キャンパスになぜ孔子像？！』、B案『パイプオルガン― その知られざる魅力』と、ふたつの案を同時進行で詰めていくことになった。難しい取材では、ふたつ以上の企画を一緒に用意しておけば、後で困らなくて済むと先生が言っていたので……」「ずいぶん待っていたら、S先生から孔子像について取材断りのメールが届いた。企画の意図がうまく

伝わらなかったのかもしれない。メールの出し方が悪かった？　作品発表まで時間がないので、午後からチャプレン室に行って、パイプオルガンについて直接取材を交渉。OK が出た。取材にしても、アポ取りにしても、やはり直接会ってお願いすると成功率が違う。メールだけでは、なかなか受け入れてもらえないと痛感した」（取材の成否を分けたやり方の違いを振り返って）

「話し合いの結果、私たちは『LA の知名度』をテーマにすることにした。『リベラルアーツ』というネーミング、さらに内容についてどれだけ一般の人が知っているのか知らないのかを調査し、広報部の人にそれをぶつけ、どのような対策が取られているのか聞くことにした。学群長先生へのインタビューも申し込むことになり、取材目的や狙いをきちんと説明できる企画書を持っていきなさい、と先生からくぎを刺される。何となく番組っぽい作り方になりそうでわくわくする」

実際の取材が始まって、町田駅前にインタビュー撮影に出向いた学生たちは、

> *「みんな足早に通りすぎるので、なかなか声をかけづらい。話しかけやすそうな人を選んで声をかけてみたけど、ティッシュ配りみたいに見えたのか、忙しいからと断られることが多くて恥ずかしかった。30 分ほど遅れてきた K 君に替わると、次第に応えてくれる人も出てきた。K 君はすいませんとも言わずに、先に質問から聞いてしまうことが多かったが、不思議とみんな立ち止まってくれたのは意外だった」「学群長先生へのインタビューでは大失敗。メールでのインタビューの申し込み方、連絡の確認など私たちの手落ちが多いと、ゼミ室でも先生から注意を受ける。改めて全員で学群長室に意見を聞きに行った。そして、他の大学でも同じような LA 制を取り入れてるところがあること、世界でも広く知られた教育の方法であることなど教えられ、私たちの勉強不足だったことを知った。」*

映像日誌からは、悶々としながらも学生たちが取材対象との距離を測り、手探りでドキュメンタリー番組の企画を詰めていく様子が伝わってくる。ほかにも、張り切って飛び出したものの、インタビューの肝心な話の途中でバッテリーが切れてしまい、泣く泣く現場を後に帰ってきた学生。一度は許可が降り、保健所による「野良猫の捕獲作戦」に同行取材したものの所長の方針変更で、けっきょく収録素材の使用が全面禁止となり、急きょ企画の変更を余儀なくされた学生など等。取材範囲が学内から学外へと広がるほどトラブルも増えていく。

しかし言うまでもなく、そうしたトラブルがけっきょくは学生自身を目覚めさせる。取

材では、事前の調査や機材の点検がどれだけ大事か、アポイントのとり方を失敗するとどれだけ恥じをかくか、現場に出ることで改めて思い知らされるからだ。

私はこの間､アドバイスらしいことはほとんど何もしない。じっと見ているだけである。バッテリー不足など、取材前にカメラ機材のチェックは怠るなとか、役所や会社相手の交渉は企画内容をきちんと文書で示せ、約束時間は厳守せよ、と基本的なことは伝えるが、後は放り出す。学生から相談が無い限り、取材途中でどんなトラブルに遭遇し、どう乗り越えてきたかは提出される「映像日誌」を読むまでは、実は私にも分からない。それでも学生たちは、何とか考え、道を探し、「壁」を乗りて越えて帰ってくる。

その一方で、作品発表日まで取材が間に合わず、ユーチューブなどからダウンロードし

他人の映像を無断で拝借、自分で撮った映像と一緒に混在編集して提出する学生が、残念なことに毎年一人か二人はいる。途端に、私は不機嫌になり「怖いおっちゃん」へと変身する。

「ビデオジャーナリズム入門講座」― 取材の「壁」

本学の学生が撮るドキュメンタリーの大半は、まだ私的体験を記録する狭い映像に過ぎないが、それでも取材を通して「社会の壁」と向き合っている。引きつづき、学生たちの映像日誌から抜粋する。

「取材する上でいちばん問題だったのが、自分が○○（取材した団体名）に深く関わりすぎてしまい、客観的な取材ができなくなってしまったことだ。インタビューや活動風景を撮影するには、相手がこちらを意識しないように撮らなければ、自然な姿は収められないし…」（東日本大震災関連の写真展を企画した団体を取材して）

「思い立って急に、カメラを持って被災地に入った。行く前の準備不足というか、町の状況調査も何もしないで行ったので、撮影がうまくいかなかった。撮影場所を移動するのに、バスの乗り継ぎ方法や時間が読めないので、せっかくのチャンスも逃し悔しい思いをした」「東京に帰って編集するときもほしい映像が見当たらず、カットの選択に困った。それでも徹夜して、総計 32 カ所のシーンに分け編集を終えることができた。編集を終えてみて、編集とは一気にやらないと流れが作れないものなんだと思った」（急きょ被災地宮城へ取材に行った留学生の日誌から）

「取材予定日に台風が来て、予定が変わりあせった。けっきょく、取材ができた日は校長先生も忙しく、時間が無いからと前から約束していたのにインタビューを断られてしまった。戸惑ったけど、取材させてもらってる身で何もいえなかった……ヤマ場に予定していた話が聞けず、これからどうしたらいいのか」（創立107周年になる自分の出身校を訪ね、戦争疎開の記録など撮影させてもらうべく校長に事前申し込みした学生）

定点取材に挑む

いずれも正直な、「映像日誌」に綴られたゼミ生たちのと惑いと、試行錯誤の声である。

社会の壁と正面から向き合う機会の少なかった彼らの中からも、取材体験を重ねることで、じっくり腰を据えて長尺のドキュメンタリー番組の制作をやって見たいという学生が、出てくる。1年もたつとドキュメンタリーとしてのテーマの選び方や、30分を超す番組にするためにどれほどの準備の時間と構成、撮影素材の分量が必要になるか、いろいろなことがおぼろげながら具体的に見えてくるのだろう。卒業制作も含め、意欲的な企画を提案する学生も現れる。

長尺モノの場合、基本的に「定点取材」のできるテーマに挑んでもらう。「定点取材」では、ほぼ年間を通しての現場通いになる。一つのテーマに執着することで、目の前に立ちはだかる壁もまた、それまでの経験とは桁違いのものになるはずだ。学生たちは、果たしてそんな現実社会の変化をどう受け止め、乗り越えて行くのか。

最後に、路上生活者の支援活動をつづけるボランティア組織「スープの会」(注7) の取材を年間を通して行い、40分あまりの意欲的なドキュメンタリー番組に仕上げた学生の、撮影記録を紹介したい。（ゼミでは、長尺モノの作品の場合「映像日誌」でなく、「撮影記録の報告」として、①企画の狙いと現実取材の過程で感じた違い、②編集時の問題点、③完成作品に対する自己評価などを、完成作品とは別に簡単なレポートで報告させている）

国際協力専攻のこの学生は、2年次の「国際協力フィールドワーク」の授業で、NPO法人「スープの会」と知り合う。そこで行われている地域交流活動「風まちサロン」に共鳴し、その活動を手伝うちに、路上生活者の社会復帰を阻む背景に、地域のつながりが薄れている問題が絡んでいることを知る。ここから彼女の、定点取材は動き出していった。彼女が、私に提出した企画書からまずその一部を抜粋する。

－定点取材企画書－

ドキュメンタリー番組『つながり』　玉利かすみ（2008年度入学生）

企画意図：

路上生活者支援団体「スープの会」の本部、「風まちサロン」の責任者、新部聖子さんのの定点取材からもう一つの新宿や社会構造を考えて見たい。

企画内容：

「スープの会」は、他の路上生活者支援団体とは少しその活動内容に違いがあります。夜間訪問で相談を受けた路上生活者を施設に紹介したり、時には、新部さん自身がケースワーカーとして定期訪問をすることもあります。また路上生活者が社会に復帰したのち、再び路上に戻らなくて済むよう、社会とのつながりを持ってもらう意図で「風まちサロン」という小さな事務所兼集いの場も設けています。「風まちサロン」は、誰でもいつでも立ち寄って話することができる場所です。そのような運営をどのような人がなぜ行っているのか。そのあり方について考えます。

2 年次から始めた、「国際協力フィールドワーク」の授業で、ある程度の事前取材ができてはいるものの、ビデオカメラを実際に活動の現場に持ち込むとなると、路上生活者の様子も当然カメラに映り込む。カメラの存在に敏感になることが予測され、この点について、彼女はまず悩んだ。

本当に取材ができるのかは、企画段階では分かりませんでした。不安材料が多かったのです。このテーマで撮ることになると、①路上生活者にカメラを向ける必要がある。②スープの会の活動の邪魔にならないか。③「風まちサロン」に来ている人が、カメラがあると来なくなってしまうのではないか。

取材依頼の際に約束したのは、「必ず許可がおりてからカメラを取り出す」「公（メディアを通じて）には公開しない」ことでした。許可が降りたあとも、最初からカメラを持って活動に参加したわけではありません。土曜日の路上生活者への訪問活動は、新宿駅周辺を 4 コースに分かれて回ります。どのコースでカメラを回そうか、どの人なら話してくれそうか、参加している支援者には迷惑にならないかを考えることから始まりました……訪問前のミーティングでは、同じコースを回る人にカメラがある旨を伝えます。映りたくないという人もいるので、アングルも意識しないといけないからです。

取材が始まれば始まったで、その都度臨機応変に対応しないと、困る場面もある。せっかくの撮影チャンスだが、撮っていいものかどうか。良心の呵責に苛まれ撮影方法に迷うこともあったという。

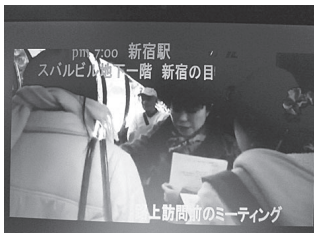
撮影記録：

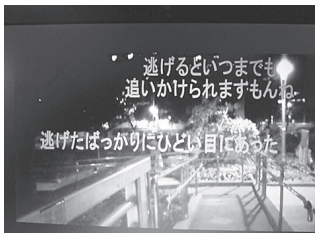
路上生活者、一人目の撮影。秋田出身で、飯場の話をしてくれた男性

一人目でこんなに話してくれる人と出会えるとは思っていませんでした。許可は新部さんが取ってくれました。私は、怒られるのではないかと、怖くて言えなかったからです。話をしながらカメラを回すのは、予想以上に大変でした。カメラを向けられていることで、男性は本当に話したいことが言えないのではないか……と考えると、私もカメラの液晶画面ばかりを見てはいられません。片手に構えながらも、顔は男性の方を向けていました。後の編集のときに気づいたのですが、音が小さいことも、その時には気づきませんでした。

夕食を食べている男性たち

この場面に写っている男性たちは、「うー、うん」と不快とも取れる返事で、少しだけ撮影をさせてくれました。路上生活者の中には、お酒が大好きで、寒さしのぎに仲間と一杯飲んでいる人もいます。映像が、話の途中で切れているのは「撮ってもいいけどよぉー……」と右側の男性が迷惑そうにしたので、すぐにカメラをしまったためです。
その後も、明らかに写っていないと分かるアングルでしかカメラを回すことができませんでした。「私はそこまでして撮りたいのか？」という疑問がよぎりましたが、少しでも路上生活者の声が伝わってほしいとの思いが勝っていました。





（写真②、③、④、ドキュメンタリー『つながり』から）

グループホームに住んでいるが、公園で寝泊まりしていた夫婦

この夫婦には撮影許可を取っていません。良くないとはわかっていましたが、すごく離れた場所から12倍ズームを付けて、後姿だけ撮らせてもらいました。夜なので全体的に上手く映っていませんが、夫婦の映像がぼやけて見えにくいのはそのためです。夫婦は寝ていたのですが、私たちが近づいて行くと、起き上がって話をしてくれました。
生活保護をもらってグループホームに住んでいるが、奥さんは集団生活が続くとストレスになってしまう。だからこうして数日間は、自分たちだけで寝るようにしているとのことでした。

借金の話をしてくれた男性

この男性の声を使おうか否か、最後まで迷いました。この男性は、高架下にいました。前回の路上訪問（11月20日）のときに、あまりにも音が撮れていなかったので、この日は前に撮った映像に音を重ねるためズボンの左ポケットに、ボイスレコーダーだけを忍ばせていったのです。

「私はね、借金をしてここまで落ちちゃった……」と話してくれました。「何年前？」

「23年になる」「じゃあもう時効ですよね。まだ借金取りが追いかけてきますか？」「そう。生活保護をもらって、住所ができると、また追いかけられることの繰り返し。もう苦しくなっちゃって……。だから住所があるよりも、ここのがいいんだよ」。

この声をドキュメンタリーで使ってしまうと、新部さんに撮影依頼した際の「必ず許可が降りてから」という約束の違反になってしまうのではないか。カメラではなく、音だけなら、大丈夫だろうか……。その時でさえも、編集で使うかはまだ決められませんでした。今でも、使ったことが正しいかは分かりません。もし使わなかったら私が路上訪問で体験した、本当のことを伝えられないと思ったからです。作為性のない、できる限り真実に近いものを作りたい思いで、録音を使うことにしたのです。

制作後記：

ドキュメンタリーは、相手が人間なので、当初の企画通りに進まないことがほとんどです。企画書では、企画内容に、「社会構造をみる」と書きました。しかし、実際は社会構造についてのナレーションを入れませんでした。意図的に伝えなくても、路上生活者のインタビューを見てもらえば、伝わると思ったからです。

撮影が終わってからも、いまも時々路上訪問に顔を出します。猫を飼っている男性は、飼い猫が子どもを産んで、さらに大家族になっています。渋谷区管轄の第三公園では役所職員による追い出しがあり、渋谷区から新宿区管轄の区域に路上生活者が移動しました。

新宿の街並みが変化するのと同じように、路上の様子も、日々変化しています。私はこれからも、新宿での活動を続けるつもりでいます。路上生活者が「見えないもの」としてではなく、「人として」みんなの目に見える日が来ることを願いながら、私は、私のできることを続けようと思います。

今後の展開

この学生は本年3月に卒業。4月からNHKスペシャルやBSドキュメンタリーの制作で知られる制作会社への入社が決まり、これからもっと息の長い「定点取材」をつづけて

行きたいと意欲を燃やす。すでにメディアを専攻する一期生の中からは制作会社に入り、報道社会番組「ズームインサタデー」（日本テレビ系）や、「やじ馬ワイド」（テレビ朝日系）などの現場でアシスタントディレクターとして動き始めた卒業生もいる。みんなまだ始まったばかりだが、視聴者との距離を推し量りながら、これから番組の作り手としての立ち位置を築いていくに違いない。

一方でテレビ報道の現場は、相変わらず、やらせ問題の多発やセンセーショナルな取材、視聴率至上主義が目に付く。テレビ番組の作り手の意識の低さが問題視されるようになってからも久しい。多様なデジタルメディアに囲まれる今日、作り手の意識が変わらなければ、テレビ報道自体が他のメディアに淘汰されてしまうだろう。

本学から巣立っていくテレビ番組の作り手たちが、こうした問題にどう向き合い、感じたこと、考えたことを伝えていくのか注目したい。ビデオジャーナリズムの手法でもある「考えながら撮り、撮りながら考える」体験を通して、学生たちは自然のうちに、実践的に映像リテラシーを身に付けてきたはずである。

ゼミでは、実践的なリテラシーの伝統を桜美林の中に定着させ、メディア（ジャーナリズム）を専攻した卒業生のネットワーク作りを今後進めて行きたいと考えている。

でき上がった作品をどういう形で最終的に残し、発表していくかも課題である。一般的には動画によるドキュメンタリー作品としてDVDに焼きこみ納品させるが、動画にしづらい過去の歴史や理念を語る場面処理をどうするかで、また頭を悩ませる。パワーポイントやワードの貼り付け機能を使って、動画、静止画、活字を組み合わせた新しい映像表現手法に行き着く学生もいる。自分の作品のゼミ発表の模様を、ユーストリームで生中継する学生も出て来た。これからどんな表現が生まれてくるのか。ビデオジャーナリストの卵たちは、いまも新しい映像表現の開拓に貪欲である。

（写真⑤、動画・静止画混載の作品）

（写真⑥、生中継されたゼミ発表）

電子メディアの時代を迎え、ビデオジャーナリズムの発表の場は、今日、映像出版物やインターネットなど多岐にわたるメディアの中に開かれている。学校教育の現場や市民メディアなどにも動画が取り入れられ、映像コミュニケーションの技術はあらゆる領域に広がってきている。地域の放送活動に、市民が提供した映像情報が使われる機会も増えてきた。東北の被災地では、被災市民自身が行政やマスコミの目が届かない問題を取材し、映像を貼り付けネットで発信し、全国に支援網が作られていく事例も報道されている。市民映像と言えども、ジャーナリズムとしての市民権を得る機会は広がりつつある。桜美林発の学生ビデオジャーナリズム映像が、世に出て行く日も遠くはないだろう。

注釈

① ビデオジャーナリスト方式：小型ビデオカメラを片手に戦場や事件現場などを取材し、編集から解説まですべて基本的に一人で行う記者スタイル。1990 年、朝日ニュースターが「映像記者」と命名し世界で最初にビデオジャーナリスト方式を導入､1992 年「ニューヨ 1」が開局し同方式が採用され、「VideoJournalist」の名は一躍世界に広まっていった

②「定点取材」方式：ヒト・モノ・事件などテーマや場所を絞り、長期にわたり取材・検証する手法

③『フリーゾーン 2000』：国内外を舞台に、環境・科学・民俗・事件・社会問題などを切り口に、8 ミリビデオで取材しレポートする番組。CS 放送局「朝日ニュースター」が 1990 年 10 月の開局時から始め、映像記者スタイルの導入で注目された

④ 映像記者：ビデオジャーナリストと同義語

⑤ 高柳財団科学放送奨励賞：日本のテレビ技術の祖といわれる高柳健次郎によって 1984 年設立された高柳記念財団が、科学放送番組の向上と発展を目差し、毎年表彰活動している

⑥ O.A.C.U：桜美林大学体育文化団体連合会の略称。学内のクラブ活動など学生団体を統括する学生組織。

⑦ ボランティア組織「スープの会」：1994 年設立され、新宿区早稲田鶴巻町に本部を置き、路上生活者の生活支援と地域振興に取り組むボランティア組織。代表の後藤浩二氏が 1994 年に設立､「『路上』から『地域』へと『暮らしの場』を紡ぐ」など息の長い活動は高く評価されている